

翻訳研究における「等価」言説

長沼美香子

(元立教大学)

Translation is a complex event of performing intercultural communication and the concept of equivalence in translation is full of scandals. This paper explores the discourse of equivalence in relation to theories and applications of translation. Even if translational equivalence in terms of form or meaning between different languages is too naïve to be postulated, the illusion of equivalence remains one of the key words in distinguishing translation from non-translation. The author will first review a main stream of Translation Studies in the European and North American academia, focusing on how the concept of equivalence gave rise to the academic discipline of translation and later became criticized as a rigid linguistic model of analyzing symmetrical texts and making translators invisible. Following that review, Japanese discourse on translation by two antipodal theorists, NOGAMI Toyoichiro and YANABU Akira, will be highlighted to open up the current discussions about the imagined translational equivalence in a Japanese context.

1. はじめに

本稿では、「翻訳学」(Translation Studies)¹における「等価」(equivalence)をめぐる欧米と日本の諸言説に焦点をあてる。翻訳と等価については語りつくされた感があるかもしれないが、異なる立場からの歴史的前提を踏まえて再考したいと思う。まず後続の第2章で、翻訳の理論と実践を研究対象とする欧米系翻訳学の成立と等価の系譜を概観する。ただし、等価という概念への筆者の着目は、言語形式であれ意味内容であれ、異言語テキスト間の等価性へのナイーブな希求とは一線を画すものである。この点を明確にするために、第3章でポストコロニアル翻訳研究を取りあげる。そして第4章では近代日本の翻訳論へと目を転じ、等価という視点から野上豊一郎と柳父章の言説を読解する。最終の第5章で全体のまとめをして本稿の結びとしたい。

NAGANUMA, Mikako, "Discourse of Equivalence in Translation Studies," *Interpreting and Translation Studies*, No.13, 2013. Pages 25-41. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

翻訳行為は異文化コミュニケーションを遂行する複雑な言語行為である。そして、翻訳が生み出す等価は、「スキャンダル」を招く翻訳の出来事だ。英語の‘scandal’という語は「醜聞」などと訳されもするが、本稿ではカタカナ語「スキャンダル」を用いる。「醜聞」も「スキャンダル」も‘scandal’の翻訳語であり、どちらにしても原語からのずれは不可避であろう。OED (*Oxford English Dictionary*) 第2版によると、‘scandal’の語源には‘trap’「罠」の意味が潜むという²。スキャンダルという語からは、ヴェヌティ(Lawrence Venuti)が1998年に著した*The Scandals of Translation: Toward an Ethics of Difference*も想起されるだろうが(本稿第3章を参照)、語本来の意味合いも同時に確認されたい。本稿では、等価とスキャンダルを不可分のキーワードとして(ことばの意味は、ずれながら反復するのが常なのだ)論を進める。

翻訳と等価の関係を論じるためには、多層的な分析が不可欠だ。翻訳行為に等価という概念を介入させることは危うい賭けでもあり、スネル＝ホーンビー(Mary Snell-Hornby)が批判するように、等価などという概念は異なる言語間にシンメトリーが存在するかのような幻想を生み出す(Snell-Hornby, 1988)。しかしながら、それでもと言うべきか、だからと言うべきか、翻訳学においては等価の記憶を途絶できない。等価概念を翻訳から抹消するのは、等価というスキャンダルを不可視のまま忘却することになるからである。等価が幻想であればこそ、なおさら等価という幻想を可視化するためのメタ的思考が必要であろう。ピム(Anthony Pym)も「翻訳のユーザーが翻訳について信じていることの多くが実は幻想であり、幻想は幻想として分析可能である」(ピム, 2010, p. 66)と述べている。

日本の文脈ではどうか。わが国には翻訳実践と格闘した漢文訓読以来の長い経験がある。その過程での理論的関心はどうであったのか。例えば、近世の国学者、漢学者、洋学者らが残した論考のなかで、われわれは翻訳についての言説に出会う。伴蒿蹊『国文世々の跡』『訳文童諭』や荻生徂徠『訳文筌蹄』などは、江戸期の翻訳論として読むことが可能だ(杉本, 1996参照)。ここには、昭和初期の谷崎潤一郎『文章読本』(1934)の「西洋の文章と日本の文章」まで連綿とつながる、文章論的なまなざしからの翻訳論の系譜がある。ただし本稿では、翻訳学における等価概念との照応を鑑みて、このような伝統的な翻訳論を一旦切断した論考を取りあげる。対蹠的に翻訳の等価と向きあった日本における言説として、ロマンティックな等価幻想に呪縛された野上豊一郎の翻訳論と、翻訳語と翻訳文体に隠蔽された等価スキャンダルを暴く柳父章の翻訳論に注目する。

2. 翻訳学事始

2.1 翻訳における言語学的側面

20世紀後半から欧米を中心に翻訳についての学術研究が体系化された契機は、翻訳と等価に関する言語学的な研究であった。翻訳学の概説書、例えばマンデイ『翻訳学入門』(2009)やピム『翻訳理論の探求』(2010)なども踏まえううえで、個別の原典を確認しておこう。

等価という用語を用いた初期の事例には、フランス語と英語の間での比較文体論がある。

ヴィネイとダルベルネ(Jean-Paul Vinay and Jean Darbelnet)による1958年の著作*Stylistique comparée du français et de l'anglais*では、翻訳方略のひとつとしての等価が論じられていた³。言語学者のヤーコブソン(Roman Jakobson)も同時期に、翻訳のためのメタ言語として等価概念を採用した。彼は1959年の論文‘On linguistic aspects of translation’で、翻訳を3種類に分類している。それは、言語記号(verbal signs)を対象として、(1)「言語内翻訳」(intralingual translation)という「換言」としての「同一言語内の別の記号による言語記号の解釈」、(2)「言語間翻訳」(interlingual translation)という「本来の翻訳」としての「別の言語による言語記号の解釈」、(3)「記号間翻訳」(intersemiotic translation)という「変異」としての「非言語記号体系の記号による言語記号の解釈」である。そして、(2)の場合を次のように説明する。

ある言語から別の言語への翻訳は、ある言語のメッセージを何か他の言語による個々のコード単位に置き換えるのではなく、メッセージ全体に置き換える。そのような翻訳は間接話法であり、翻訳者は別の情報源から受け取ったメッセージを再びコード化して伝える。かくして翻訳は、2つの異なるコードにおける2つの等価なメッセージを伴うのである。

(Jakobson 1959/2004, p. 139, 強調引用者)

このように言語学的な観点から、等価関係にあるメッセージとして翻訳テキストを捉えたのである。いわゆる「直訳」か「意訳」⁴かという、古代ギリシャのキケロ以来何世紀にも及ぶ「不毛な議論」(Steiner, 1975/1998)から一步踏み出して、翻訳は言語学的研究の対象となった。ただし後に、言語学的アプローチは翻訳学の文化的転回⁵を提唱する研究者から批判されることになる。狭義の静的な言語的等価性は、翻訳学のスキャンダルとなったとさえ言えるだろう。だがもう少し、等価の系譜を辿ってみる。

2.2 等価の諸相

コラー(Werner Koller)は、対照言語学がラングの「対応」(Korrespondenz)を研究する一方で、翻訳研究ではパロール間の「等価」(Äquivalenz)が対象になると指摘した(Koller, 1989)。翻訳を言語分析するなかで、等価の議論はいくつかのバリエーションに進展し、その分類の多様化という道を歩んだ。

1960年代に遡れば、ナイダ(Eugene Nida)による等価に関する言説がある。これは、代表的著作2冊が1970年代に邦訳されて、日本でも早くから紹介された。1964年の*Toward a Science of Translating*は1972年に『翻訳学序説』として、1969年の*The Theory and Practice of Translation*は1973年に『翻訳—理論と実際』として邦訳が刊行されている。前者は、生成文法に基づき翻訳を「科学」として研究するという姿勢が当時としては画期的であった。また後者は、テイバー(C.R. Taber)との共著であるが、日本語版ではさらにブラネン(N.S. Brannen)が加わることで、翻訳のために原著が改められるというユニークな方法

を採用している⁶。

ナイダの有名な分類は、起点言語志向の「形式的等価」(formal equivalence)と受容者志向の「動的等価」(dynamic equivalence)である。そして、ナイダ自身は動的等価によって翻訳から異質性を排除し、「起点言語のメッセージに対して最も近い自然な等価」を目指した。この志向性は、ナイダが聖書翻訳者であったことと密接に関係する。つまり、絶対的な神のことは異言語に翻訳することで、異教徒を改宗させるという逼迫した要請があったのである。

その後の等価への関心は、翻訳類型の二項対立に引き続き発展していった。例えば、ハウス(Juliane House, 1977; 1997)の「顕在化翻訳」(overt translation)と「潜在化翻訳」(covert translation)、ニューマーク(Peter Newmark, 1981)の「意味重視の翻訳」(semantic translation)と「コミュニケーション重視の翻訳」(communicative translation)、ノード(Christiane Nord, 1997)の「記録としての翻訳」(documentary translation)と「道具としての翻訳」(instrumental translation)などの二項的な翻訳方法は、コミュニケーション行為としての翻訳がどのような等価を規定的に志向しているのかをとらえたものである。ピム(2010, p. 55)に従えば、これらは「方向的等価」(directional equivalence)という概念でまとめることもできる。

2.3 等価を超えて

翻訳についての言語学的研究は異言語間における等価への探求から出発し、等価を類型化し分類するという点では一定の精緻化もなされた。だが、トゥーリー(Gideon Toury)の「記述的翻訳研究」(descriptive translation studies)では、等価を超えて反対方向から眺めることになる。つまり、等価はすでにそこに存在する、と措定したのだ(Toury, 1995)。

まず、翻訳とは何かという難問に対するトゥーリーの答えは明快だった。それは、翻訳であると見なされているものが翻訳であるという、同義反復と思えるものの、虚を突いた定義であった。そして、目標テキストが所与の起点テキストの翻訳であれば、そこに等価の関係がすでに成立していることを自明とするのだ。このように、翻訳と等価をアプリアリに仮定してしまえば、その関係を成り立たせる社会文化的な「翻訳規範」(translational norm)の分析へと向かうことが可能となる。

トゥーリーによれば、翻訳とは「規範に支配された活動」(norm-governed activity)である(ibid., pp. 53-69)。翻訳者の翻訳行為は、拘束力のある規則から個人的な特異性の間に拡散する連続体としての「規範」(norm)に制約され遂行されるのだ。この規範という概念は社会学からの援用で、不安定な社会文化的特性を有するものであり、それゆえに交渉可能である。等価を前提として翻訳規範の交渉を明らかにしようとするトゥーリーらの研究は、翻訳の等価を規定的概念から歴史的概念へと変容させた。そして翻訳規範の研究は、「翻訳の普遍性」(universal of translation)を求める道へと向かったが、等価そのものを生成する翻訳行為のイデオロギー性は不問とされた。

3. スキャンダル、不可視性、ポストコロニアル

翻訳テキストに対する言語学的な等価分析を拒み、記述的翻訳研究の規範概念が価値観から離れたものあることに異議申し立てをしたのは、アメリカで活躍するイタリア語－英語の翻訳者かつ翻訳研究者のヴェヌティである。また、フランス現代思想の影響を受けたニランジャナ (Tejaswini Niranjana) は、ポストコロニアルな観点から 19 世紀インドにおける植民地政策と翻訳の問題系を論じた。両者の主張に共通するのは、起点言語と目標言語の間に力の不均衡があれば、翻訳は非対称的な権力関係から逃れることができないという立ち位置から、英語への翻訳に顕現する暴力性に抗議する姿勢である。ポストコロニアル翻訳研究においては、言語学的等価性の分析そのものがスキャンダルとなる。

3.1 翻訳のスキャンダルと不可視性

ヴェヌティは翻訳のスキャンダルと翻訳者の「不可視性」(invisibility)を問題とする。特に英語圏において、文化的、経済的、政治的に翻訳と翻訳者が周辺化されている現実には注意を喚起し、英国や北アメリカなど、いわゆるアングロ・アメリカ文化における翻訳の位置づけを問題視する。ヴェヌティによれば、「透明性という幻想」を生み出し、翻訳行為が隠蔽される状況が翻訳のスキャンダルである (Venuti, 1995/2008, 1998)。

アングロ・アメリカ文化においては、違和感のない滑らかな翻訳文体、つまり翻訳でありながら翻訳ではないような翻訳が好まれる。これには出版社・編集者・評者・読者など出版業界内外の関係者の指図や意見が深くかかわっている。そのような環境下での翻訳実践の結果として、異質性や他者性を消去した翻訳作品が生産される。翻訳は原作の二次的な派生物として消費され、翻訳者は不可視の存在となるのである (Venuti, 1995/2008, pp. 1-34)。

「同化的翻訳」(domesticating translation)と「異化的翻訳」(foreignizing translation)⁷という2つの方略を提示するヴェヌティは、異質な外国語で書かれた起点テキストを自民族中心的な目標テキストとして受容する同化的翻訳方略を批判した。この二項の起源となっているのは、ドイツ・ロマン主義の神学者シュライアーマハー (Friedrich Schleiermacher) による 1813 年の講義録、‘Uber die verschiedenen Methoden des Ubersetzens’ (邦題「翻訳のさまざまな方法について」) である。

...翻訳者が辿る道はどういったものでしょうか。私が見たところでは道は 2 つしかありません。著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません。

(シュライアーマハー, 1813/2008, p. 38)

シュライアーマハーは異化作用の手法によって、「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす」ことを推奨し、これがヴェヌティの異化的翻訳へと受け継が

れた。ただし、ヴェヌティ(1998, pp. 9-20)は、「マイノリティ化翻訳」(minoritizing translation)という語も使用している。英語への翻訳行為における異化的方略の呼びかけには、英語帝国主義に対するマイノリティ言語の抵抗という構図があるのだ。

アングロ・アメリカ文化における日本文学の受容のされ方に関しても、第二次世界大戦後 1950 年代 60 年代に英訳された川端康成、三島由紀夫、谷崎潤一郎などの「日本的」作品が、近代日本文学の正典となった点が指摘されている(ibid., pp. 67-75)。覇権的な言語としての英語への翻訳という出来事では、どの作家が誰によって選択され、それがどのような方略で翻訳されたのかを検証することで、翻訳行為の「オリエンタリズム」が露呈されるのである。

3.2 ポストコロニアル翻訳研究

ポストコロニアルなアプローチからの翻訳研究は、異なる言語間の不均衡な権力関係を問題とする。そして、翻訳行為がもたらす言語間の不平等性に闘争を挑む。このような非対称性は、現代の翻訳学では特に英語という支配的な言語へと翻訳される際に顕著となる。バスネットとトリヴェディ(Susan Bassnett and Harish Trivedi)が 1999 年に編集した *Postcolonial Translation: Theory and Practice* は、そのような論考を集成した論文集である。また、スピヴァック(Gayatri Chakravorty Spivak)は「翻訳の政治学」(1996)において、西洋のフェミニズムを非難しながら、抑圧されたアイデンティティが英語に翻訳されることによって歪曲され続けてきたと論じる。

ニランジャナによる 1992 年の *Siting Translation: History, Post-structuralism, and the Colonial Context* では、ポストコロニアルな文脈において民族や言語の間の不平等と非対称を明らかにするために、翻訳実践の役割とその問題を定置する。ド・マン(Paul de Man)、デリダ(Jacques Derrida)、ベンヤミン(Walter Benjamin)らを読解しながら、植民地における「従属化(主体化)」(subjection/subjectification)がどのように実践されてきたのかという点で、翻訳の果たした役割を位置づけるのである。

整合的で透明なテキストと主体を創出するときに、翻訳は多様な言説を横断して植民地の文化を定置することに参与する。そして、植民地の文化が歴史的に構築されたものでなく、あたかも静的で不変なものであるかのように思わせる。翻訳はすでに存在する何かの透明な現前として機能する。だが、その「オリジナル」は実際には翻訳を通してもたらされるのである。逆説的に言えば、翻訳はまた、植民地の人々にとっての「歴史」における場所をも提供するのだ。

(Niranjana, 1992, p. 3)

こうしてニランジャナは英語への翻訳によって、植民地の主体(臣民)や歴史が逆説的に構築され、「東洋」のイメージが書き換えられた点を糾弾し、「支配者なき植民主義」(absentee colonialism)という表現で翻訳の責任を問うのである(ibid., p. 8)。

言語間の非対称性の力学は、近代日本における翻訳の実践においても見過ごされてはならない。ただしここには、西洋語と日本語、日本語と旧植民地の諸言語という二重に非対称的な権力関係が介在している。このうち西洋語からの翻訳について言えば、西洋の植民地支配下になかったにもかかわらず、日本が西洋語への過剰な模倣と擬態を示した点で、ニランジャンナの「支配者なき植民地主義」は、小森陽一の「自己植民地化」とも通底する。小森によれば、自己植民地化とは近代日本において「欧米列強という他者に半ば強制された論理によって、自発性を装いながら植民地化する状況」である。

あたかも自発的意志であるかのように「文明開化」というスローガンを掲げて、欧米列強を模倣することに内在する自己植民地化を隠蔽し、忘却することで、植民地的無意識が構造化される。

(小森, 2001, p. 15)

福沢諭吉は 1875 年の『文明論之概略』で、文明開化の度合いを「文明・半開・野蛮」という三段階に相対化した。この見方では、欧米列強の「文明」に対しては「半開」でしかない日本が、「野蛮」な周辺地域を領土化するために、「野蛮」を発見し続けると同時に、「文明」への擬態と模倣が常に要請される。

国を挙げて文明開化を掲げた近代日本では、翻訳主義が採用された(加藤, 1991; 丸山・加藤, 1998 参照)。その結果、矢野文雄『訳書読法』の「序」で述べられているように、「方今訳書出版ノ盛ナルヤ、其ノ数幾万巻、畜ニ汗牛充棟ノミナラザルナリ」という状況も生まれた⁸。明治政府にとって、西洋の科学技術や社会制度などを翻訳することは死活的に重要な国家事業であり、開化啓蒙期の日本の翻訳は、西洋語と等価である(と虚構された)翻訳語とそれを統辞的に配列する翻訳文体で西洋文明を表象していた(はずだと思こまれた)。ここにポストコロニアルな視線を照射すれば、翻訳行為によって遂行された等価が西洋文明への擬態を可能にし、模倣に隠された自己植民地化へと導いたと言える。

4. 近代日本の翻訳論と等価

ここからは、わが国の翻訳論のなかでも、とりわけ等価への見果てぬ夢を抱いた野上豊一郎と、翻訳語と翻訳文体における等価の虚構を暴いた柳父章の言説に的を絞って論じる。両者の翻訳論を対比的に読みながら、両極にある日本の等価言説を考察する。

4.1 野上豊一郎の翻訳論：浪漫的等価⁹

夏目漱石門下の英文学者、野上豊一郎は能楽の研究者としても著名である。彼は小冊子の「翻訳論」に続き、『翻訳論—翻訳の理論と実際』を出版している。まず 1932 年に「翻訳論」が「岩波講座 世界文学」のシリーズの一冊として刊行された。これは、1938 年の『翻訳論—翻訳の理論と実際』に「翻訳の理論」という章として再録され、さらに「翻訳の態度」「日本文学の翻訳」「謡曲の翻訳について」「菟菟問答」などが追加された。この 1938

年版の『翻訳論』は、200頁超の本格的な翻訳理論書である。同時代評は概ね良好であり、多くの書評も出た。とりわけ小林秀雄は、「大変面白く読み、教へられる処が多かった。恐らく外国にも類書はないだろう。あつてもこんなに翻訳上の諸問題を綿密に論評したものは無いだろう」と絶賛している¹⁰。ところがその後は、翻訳理論としての継承発展は特になかったと言わざるを得ない。そして1970年代以降は日本語の「翻訳調」批判を背景として、野上の「直訳」擁護的な主張は実務者から厳しく攻撃された(例えば、別宮, 1975など)。ただし近年では翻訳の文化史という観点から、野上の翻訳論の再評価も提起されるようになった(鈴木, 2012参照)。だが筆者は、等価の陥穽にはまったスキャンダルとして、野上の言説を再読できると考える。

野上が翻訳論を発表した戦間期の1930年代とはどのような時代であったのか。保田與重郎らが文学同人誌『日本浪漫派』を創刊したのが、1935年である。野上自身は同人ではなかったが、伝統美への回帰と西洋近代への屈折したまなざしのなかで、彼の翻訳論は発表されたのである。『翻訳論』の冒頭は「世界が一つの読書サークルを形作らうとしたのは大分以前のことであった。西洋で逸早くそれは形づくられ、思想的に国境はとづくに取りはづされ、東洋でも日本は率先してそれに参加した」(野上, 1938, p. 1)とはじまる。翻訳に対する野上の考え方は、日本が欧米諸国と比肩しようとした時代の思潮と重なる。

野上は色のメタファーを随所で多用して、究極的に翻訳が目指す透明性を語る。「無色の翻訳」「単色版的翻訳」などの言説は、西洋語と日本語の関係が対等であることを前提とする。そして、異言語間に存在する壁を否認する強い欲望が見え隠れする。さらに目を引くのは、もうひとつのキーワード「等量的翻訳」である。これについては、『翻訳論』以前の論考でも次のように表現されていた。

翻訳はAの国語で言ひ表はされてある事なり心持なりを、その通りにBの国語で言ひ表はさうとするのであつて、其の際、原物に盛られた思想感情の同じ分量が複製の中にも盛られねばならぬのである。盛られたものが原物に比較して過多に失する場合も、不足の場合と同様に失敗である。ただ表現する言葉が違ふだけのことで、中身は全く同じ本質で、同じ分量でなければならぬ。

(野上, 1921, p. 135)

ここに述べられた「思想感情の同じ分量」「同じ本質で、同じ分量」という考えが、『翻訳論』では、「等量的翻訳」として明確に概念化されることになる。「西洋のものを日本のものらしく書き直す」という意味での等価ではなく、「西洋のものを西洋のものらしく日本語で表現する」ために、「従来の日本文の文脈を破」り、新たな表現様式を創出することを志向したものであった(野上, 1938, pp. 195-234)。西洋が日本語で表象できるという、ある種ロマン主義的な等価性を追い求めるのである。

しかしながら、実はこの概念化自体に野上独自の考えと言い切れない疑念が残る。『翻訳論』の理論的著述の全体に西洋近代の翻訳論が色濃く投影されているからだ(長沼,

2010)。

ほぼ同時代を生きた英国の古典学者ポストゲイト(John Percival Postgate)は、1922年に *Translation and Translations: Theory and Practice* を刊行している。ポストゲイトは、‘commensurateness’(同等)という語を繰り返し用いたが、この語の意味するところは、“A translation must be true to its original in Quantity as well as Quality. The two are not independent, and inattention to the former cannot fail to affect the latter.”「翻訳は量と質において、オリジナルに忠実でなければならない。量と質は自立したものではなく、量への無関心は質へと影響しないはずはない」(Postgate, 1922, p. 65)と、量と質の両面からの等価である。野上の「等量的翻訳」という概念はポストゲイトをそのまま踏襲していることになる。

完全な翻訳は、第一に、原作の表現が一語一語の末まで正確な意味を把握して伝えられなければならない。次に、用ひられた国語の特性が原作の国語の特性を最近似の度合に於いて連想させるものでなければならない。最後に、さうやつてまとめ上げられた翻訳は、全体として、措辞・語法の点から見ても、文勢・格調の点から見ても、原作のそれ等と同質・同量のうつしとなつてゐなければならない。

(野上, 1938, p. 93)

野上は翻訳における忠実性の理想を掲げるが、それは西洋語と日本語との透明な等価性という幻想に囚われた帰結であった。西洋の翻訳論、とりわけポストゲイトの理論的論考を引き写した野上の翻訳論は、二重の意味で等価のスキャンダルに翻弄された。日本浪漫派の時代に応答するかのように、いわば浪漫的等価の罠にはまったのである。

4.2 柳父章の翻訳論：日本語のスキャンダル

Translation Studies という名称が初めて提唱されたのは、1972年の国際応用言語学会でのホームズ(James S. Holmes)の発表である(Holmes, 1988/2004)。日本ではこの年に、柳父章の最初の著作『翻訳語の論理—言語にみる日本文化の構造』が刊行されている。本書においてもその後の一連の翻訳論においても、「等価」という語を直接用いるか否かにかかわらず、柳父の翻訳論は近代日本語に潜む等価幻想を暴くものである。『翻訳語成立事情』(1982)のなかで翻訳語が成立した歴史を考える際には、「単にことばの問題として、辞書的な意味だけを追うというやり方を、私はとらない。ことばを、人間との係わりにおいて、文化的な事件の要素という側面から見ていきたいと思う。とりわけ、ことばが人間を動かしている、というような視点を重視したい」(p. 47)と述べる。また、『近代日本語の思想—翻訳文体成立事情』(2004)では、「日本の近代を、西洋近代から到来した文明の言葉の事件として、その文字の翻訳という側面から迫ってみたい」(pp. 195-196)とする。こうして、「文字の出来事」として、翻訳語と翻訳文体に隠された日本語のスキャンダルが明らかにされる。

4.2.1 翻訳語の成立

翻訳語という「不透明」なことばを多量に生産した近代日本語の歴史を振り返りながら、柳父(1972, p. 10)は西周の述懐を引用する。

本邦従来欧州性理ノ書ヲ訳スル者甚タ稀ナリ是ヲ以テ訳字ニ至リテハ固ヨリ適従スル所ヲ知ラス且漢土儒家ノ説ク所ニ比スルニ心性ノ区分一層微細ナルノミナラス其指名スル所モ自ラ他義アルヲ以テ別ニ字ヲ選ヒ語ヲ造ルハ亦已ムヲ得サルニ出ツ

これは、Joseph Haven 著 *Mental Philosophy* (1869) の西周訳『心理学』(1875-76) における「凡例」の一節である。西に代表される当時の知識人翻訳者は、「固ヨリ適従スル所ヲ知ラス」という訳字について、「語ヲ造ルハ亦已ムヲ得サルニ出ツ」という方針に従って翻訳と格闘した。西洋語からの翻訳のために使用された膨大な漢語には、漢籍からの借用もあれば新造語もあり、この現象自体は国語学的研究においても従来から指摘されている(森岡編, 1969; 佐藤, 1986; 高野, 2004 など)。けれども、翻訳研究として重要となるのは、それらの語彙が翻訳プロセスで等価として選択された、あるいは選択されたがゆえに等価であるという幻想が生まれた点である。翻訳行為の遂行によって等価が成立したのだ。旧来から存在していたか新たに造語されたかの如何を問わず、近代日本語における翻訳語としての漢語が過去を継承しながらも切断し、西洋語の等価物として誕生したのである。

柳父は翻訳語を意味の乏しいことばであるという。しかも、それは誰にも気づかれにくい。いわば日本語における翻訳語のスキヤンダルなのだ。翻訳語は異言語と相互参照され、意味は此岸にはなく彼岸にあるのかもしれない(あるいは、どこにもない)のだが、その事実自体は等価幻想によって隠蔽される。翻訳行為は虚構としての等価を生み出すが、この日本語の出来事は、日本人が漢字という文字を受け入れた古代にまで遡る。

哲学者の中村雄二郎は、国語学者の時枝誠記の日本語文法論を参照しながら、かつて次のように述べて、時枝の「言語過程説」は「事としての言語観」の上に築かれるものとした。

時枝によれば、日本の伝統的な言語論の特色は、一般にヨーロッパの言語学が言語を物として見る傾向がつよいのに対して、言と事を同一視するような考え方がつよいことにある。だが、どうしてそういう特色が生まれたのだろうか。それは言う事の根本に心があつて、心が発動されて言語になるというように見なされてきたからであろう。

(中村, 1993, p. 69, 強調原文)

中村は『古今集』の序文「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」も引きながら、「心が発動されて言語になる」ことを説明する。だが、「言と事を同一視するような考え方」というのは、文字以前の状況を想定すれば想像に難くないのではないか。文字をあてる前には「言」「事」という区別はなく、ただ「コト」という「やまとことば」だけがあつたに

すぎない。柳父(1972, pp. 88-135)によれば、『万葉集』のなかでは借訓文字である「事」「言」の文字がいずれも「コト」にあてられている¹¹。とは言え、「事」と「言」という別の概念を持つ借字を無頓着に混用しているのでもなく、その区別は無知であったのでもない。つまり、「事」と「言」を「同一視」しているのではなく、「やまとことば」の「コト」という根源的に「同一」のことばだったのであり、意識的に混用できたのである。しかしながら、「やまとことば」と借訓文字の等価性という思いこみは、このように気づかれにくい。

一般的に言って、日本人は、外来の文字を、必ずしもその原語の概念どおりに受けとめてきたのではない、と私は思う。このことは、近代以降、ヨーロッパ文明の言葉を翻訳語として受け入れて後の事情についても、基本的に変わりはない、と思う。

(柳父, 1972, pp. 89-90)

古代においては漢字という文字を受け入れ、さらに明治期には漢字二字の多くの翻訳語が翻訳行為によって誕生した。近代の翻訳語では、西洋語という異言語の意味を漢字という異言語の文字で表記している事実は無意識のなかに沈められて、西洋語と等価な意味をもつ近代日本語という虚構が成立したのである。

4.2.2 翻訳文体の思想

近代日本の翻訳論として最も有名な言説のひとつは、おそらく二葉亭四迷による例の「原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして…」という件を含む「余が翻訳の標準」(『成功』第8巻3号, 1906)であろう。上記に続く部分はこうである。

出来上った結果はどうか、自分の訳文を取って見ると、いや実に読みづらい、佶倔聱牙だ、ぎくしやくして如何にとも出来栄えが悪い。従つて世間の評判も悪い、隅々賞美して呉れた者もあつたけれど、おしなべて非難の声が多かつた。

後になって四迷が得た日本近代文学における言文一致文体への高い評価とは裏腹の、この「佶倔聱牙」の翻訳文体とは何であったのか。この点を考える糸口を柳父が指摘している。それは、大日本帝国憲法の文体に頻出するような「主語」構文であり、小説においては三人称代名詞「彼」「彼女」、学術論文においては未知難解な抽象名詞で始まる「センテンス」の成立である。近代日本語は言文一致という過程を経て成立したと言われるが、文字通りに「言」(音声言語)と「文」(書記言語)とを一致させることは不可能であり、西洋語からの翻訳が近代日本語形成に深く関与している。

近代日本語に、「主語」らしい文法要素がつくられ、またこの「主語」を受けて、文を結ぶ「である。」という文末語もつくられた。それは、日本語の中で果たしたのは、上から

下へ天降ってくる演繹的論理を導く新しい機能であったが、とにかく西洋語の主語の翻訳という使命を果たしていた。それによって、近代西洋の法律、文学などの思想内容を持ち運んでくる役割を果たしていた。とりわけ、最先端の新しい未知の概念を持ち運んでくるのに有効であったようである。

(柳父, 2004, p. 141)

日本語文体の諸相は、西田幾多郎の哲学や時枝誠記の日本語文法論など、日本語の思想と文体を論じる場面でも論じられることがある。西田の「述語論理」と時枝の「言語過程説」を結び付けて、両者の共通性から「日本語の論理」を言語主体ではなく「場所の論理」とする見方である(中村, 1993, pp. 63-74 参照)。

柳父はこのような見解を一応は認めつつ、近代日本語の翻訳文体という点から、独自の文体論を展開する。大槻文彦以来、西洋文法をモデルとして日本語文法を論じてきた反省として三上章の主語廃止論を首肯しながらも、近代日本語の「主語」を括弧つきで用いる立場である。

柳父の翻訳論の核心にあるのは、翻訳との出会いを契機に日本語が引受けてきた矛盾である。日本列島において漢字が使用され始めて以来続いてきた、異質な文化の文字と語彙文法を受容した日本語が孕む等価への思いこみが呼び出される。翻訳による異文化との出会いは、日本語文体の思想をも変容させてきたのだった。

時枝の説く「陳述」は、伝統的な日本文においては、「辞及び陳述を客体的なものから切離して、主体的なものの表現」と考えられている。その文法構造を受けて考えるならば、近代以後に翻訳の場で作られた「である。」や「た。」や「ル形」は、客観的な判断の内容を包み込んでいる、と言えるだろう。即ち、客観的判断内容を「主体的なものの表現」で包み込むといういわば矛盾した構造である。それは、結局近代日本語における翻訳文の持つ本質的な矛盾ともいえるのではないか。西洋舶来の客観的、論理的内容や、人間世界についての客観的叙述は、いったん翻訳者や学者や作家の「主体的なものの表現」に納められ、そこで「主体的」な変容をこうむる。

(柳父, 2004, p. 162)

例えば、英語の **be** 動詞によって **A=B** という関係を定義する構文は、「(主語)は～である。」と近代日本語では翻訳されるが、その意味は、「発言者の立場から整序され、色づけされ、つくりなおされる」のである。そして、「主語」の空間に置かれた名詞が抽象的な翻訳語である場合には、その客観的な意味内容が明確でなくとも、主体的な解釈によって評価されて次第に変化していく。このような構文装置に仮託して、夥しい西洋の思想や学術テキストが日本語へと翻訳されてきたのである。

柳父が指摘するように、「未知な概念を未知なままで、この構文を通じて受け取ることに、私たちはそれなりに慣れてきた」(ibid., p. 167) のかもしれない。と同時に、翻訳行為の遂

行性を無意識の淵へと閑却するがゆえに、等価が幻想にすぎないことは忘却されて、あたかも自明の意味が存在しているかのようにふるまうことにも慣らされてきた。ここに、等価というスキャンダルの罣が仕掛けられている。

5. おわりに

本稿では、翻訳学における「等価」という鍵概念を確認したうえで、日本の翻訳言説と接合し、野上豊一郎が囚われ、柳父章が暴いた等価幻想を明らかにした。従来は別々に語られてきた欧米系の翻訳学と日本の翻訳論に等価という補助線を引いてみたのだ。そこに潜んでいたのが「スキャンダル」という罣である。

翻訳不可能論にもかかわらず現実に翻訳は存在し、異言語間のコミュニケーション行為は遂行されている。等価という概念は気まぐれでさえある。翻訳の等価は、ないと言えないし、あると言えもある。その意味で、想像された等価概念を虚構と呼ぶこともできる。欧米の翻訳学史においては、等価への求心力が遠心力に転じて、翻訳の等価は時代遅れの幻想になってしまったのかもしれない。等価の探求が翻訳学の成立に寄与した反面、文化的転回が等価をスキャンダルにしたのだ。だが日本においては、特に明治以降の近代化のなかで翻訳を考察するために、等価という概念は幻想であれ何であれ、さらには幻想であればこそ、可視化しておくべきもの、と筆者は考える。柳父も指摘するように、他者との「未知不可解な出会い」における翻訳は、日本語をめぐる出来事である。特に「近代化＝西洋化」という啓蒙の幻想図式を成立させるためには、西洋の言語と等価であると虚構された翻訳語と翻訳文体が必要であった。

原作の派生物としての翻訳、著者性を有しない翻訳者は不可視の存在とみなされる傾向にある。翻訳実践には長い時間が流れているが、翻訳学として学術的に体系化され始めたのが 20 世紀後半であるのも故なきことではない。若い学問の典型として、翻訳学も学際性に富む領域であり、言語学、文学、歴史学、哲学、社会学、心理学、コミュニケーション学など諸学問やその下位領域との関連は深い。Translation Studies という名称は Cultural Studies (カルチュラル・スタディーズ) を想起させるが、ともに現代的な問題への関心を共有している。いまの日本では、とりわけ 3.11 を契機とした思考と相俟って、さまざまなテキストの読み直しが求められている。このような時代のなかで翻訳テキストを読む際には、日本語に記憶された等価幻想の可視化は避けて通れない課題である。

.....

【著者紹介】

長沼美香子 (NAGANUMA, Mikako) 通訳と翻訳の知的可能性への関心から、理論研究・実践・教育に取り組む。『日本の翻訳論』(共編著) (法政大学出版社, 2010)、『深層文化』(翻訳) (大修館書店, 2013) ほか。

.....

【注】

1. Translation Studies には日本語の定訳がない。マンデイ(Jeremy Munday)による2008年の翻訳理論の概説書 *Introducing Translation Studies* が『翻訳学入門』として2009年に邦訳刊行され、日本通訳翻訳学会の学会誌名が2008年に『通訳翻訳研究』(*Interpreting and Translation Studies*)と改称されたことなどから、「翻訳学」「翻訳研究」などが比較的良好に用いられるが、人口に膾炙してきたとまでは言えないかもしれない。「トランスレーション・スタディーズ」や「TS」という表記なども候補だろうか。ちなみに、「翻訳学」という語はナイダ(Eugene Nida)の *Toward a Science of Translating* の邦題『翻訳学序説』として1972年にすでに登場しているが、原著のタイトルに Translation Studies という語は含まれていない。なお本稿全般における外国語原文の引用では基本的に既訳を参照しているが、部分的に変更した箇所もある。既訳のないものは筆者自身の翻訳による。
2. 現代日本の英和辞典でも、その語源についてギリシャ語 ‘skandalon’ に言及し、「わな、つまずきの石」『ジーニアス英和大辞典』(大修館書店, 2001)、「わな、精神的わだかまりの原因」『ランダムハウス英和大辞典』(小学館, 1994)などと説明している。
3. 英訳は1995年に *Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation* として刊行された。本書でヴィネイとダルベルネは、「直接的翻訳」(direct translation)と「間接的翻訳」(oblique translation)という翻訳方法を示して、それを7つの手順(「直接的翻訳」を「借用」(borrowing)、「なぞり」(calque)、「直訳」(literal translation)の3つ、「間接的翻訳」を「転位」(transposition)、「調整」(modulation)、「等価」(equivalence)、「翻案」(adaptation)の4つ)に分類する。ここでの「等価」とは諺や熟語など定型表現を翻訳するために用いる方略のひとつであり、例えば、フランス語の ‘Aïe!’ ‘cocorico’ ‘Deux patrons font chavirer la barque.’ が、英語では ‘Ouch!’ ‘cock-a-doodle-do’ ‘Too many cooks spoil the broth.’ に相当するというものである。ピム(2010, pp. 11-41)は、このような等価を「自然的等価」(natural equivalence)としている。
4. ここでは「直訳」「意識」という語を便宜的に用いたにすぎない。英語の ‘literal translation’ と ‘free translation’ あるいは ‘word-for-word translation’ と ‘sense-for-sense translation’ などに厳密に対応するわけではない。
5. 翻訳学における「文化的転回」(cultural turn)の用語は、スネル＝ホーンビーの1990年の論文 ‘Linguistic transcoding or cultural transfer: A critique of translation theory in Germany’ による。
6. ブラネンによる「日本語版への序」には、ナイダの監修のもとで、「原著にある聖書の例文を大幅に削除したり、他の文学からの例を代りに挿入したり、新しい例をもつけ加えたりしているので、翻訳というよりは原著を活かした改作」(ナイダ・テイバー・ブラネン, 1973, p. viii)であることが説明されている。
7. ‘domestication’ と ‘foreignization’ の別の訳語には、それぞれ「受容化」「内国化」「馴化」と「異質化」「外国化」などもある。
8. 矢野文雄(号は竜溪)による『訳書読法』は1883年に刊行された翻訳書案内である。その

- 「序」は吉浦生が書いている。
9. roman「ロマン」を「浪漫」と漢字表記した嚆矢は漱石である。1908年の「作家の態度」という小説論に、「一度かう云ふ風に押し立てられると、スコットは浪漫主義で浪漫主義はスコットであると云ふ風にアイデンチファイされる様になります」とある。本稿では野上との同時代性を考慮して、その後の文学機関誌『日本浪漫派』(1935-38)に倣い「浪漫」と表記する。日本浪漫派については、橋川(1960/1998)、ドーク(1999)などを参照。
 10. 本書の同時代評価としては複数の書評から確認できる。小林秀雄以外にも、阿部知二「野上豊一郎『翻訳論』」(『文學界』1938年5月号)、本多顯彰「野上氏の創見多き翻訳論」(『東京日日新聞』1938年4月27日)、小林英夫「野上豊一郎氏著『翻訳論』」(『東京朝日新聞』1938年5月9日)、中島健蔵「『翻訳論』の示唆 野上豊一郎氏の近著について」(『帝国大学新聞』[復刻版]不二出版, 1938/1984)などが主なものであり、いずれも肯定的な論調である。なお、大山定一は吉川幸次郎との『洛中書問』(初出は1944年6月から12月の『学海』誌上)において、野上の『翻訳論』に対する否定的な意見を述べている。
 11. 同書では、万葉集における「タマ」についても、「玉」「珠」「霊」「魂」の表記文字があてられていることから分析が進められている。「コト」と「タマ」を合わせれば「コトダマ」ということとなり、現在では「言霊」という文字で普通は表記される。この結果、上代日本人の言霊信仰を解釈する際に、その解釈の方向付けが既に解釈以前に与えられてしまっていると、柳父は指摘する。「このコトは、「言」であるか、「事」であるか、また、このタマは、「玉」であるか、「霊」であるか。問題は、いかなる文字か、である。果して、いずれかの文字の概念で割り切れるのか、という問題、そればかりではない、およそ何らかの漢字に置き換え得る言葉なのか、ということは、今までほとんど問題にされてこなかったように思われる」(柳父, 1972, p. 89)。

【参考文献】

- Bassnett, S., & Trivedi, H. (Eds.). (1999). *Postcolonial translation: Theory and practice*. London and New York: Routledge.
- 別宮貞徳(1975)『翻訳を学ぶ』八潮出版社
- ドーク, K. M. (1999)『日本浪漫派とナショナリズム』(小林宣子訳) 柏書房 [原著: Doak, K. M. (1994). *Dreams of difference: The Japan Romantic School and the crisis of modernity*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.]
- 橋川文三(1960/1998)『日本浪漫派批判序説』講談社
- 福沢諭吉(1875/1962)『文明論之概略』岩波書店
- Holms, J. S. (1988/2004). The name and nature of translation studies. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader, second edition*. (pp. 180-192). London and New York: Routledge.
- House, J. (1977). *A model for translation quality assessment*. Tübingen: Gunter Narr.

- House, J. (1997). *Translation quality assessment: A model revisited*. Tübingen: Gunter Narr.
- Jakobson, R. (1959/2004). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader, second edition*. (pp. 138-143). London and New York: Routledge.]
- 加藤周一(1991)「明治初期の翻訳」加藤周一・丸山真男校注『翻訳の思想』(342-380 頁) 岩波書店
- Koller, W. (1989). Equivalence in translation theory. In A. Chesterman (Ed.), *Readings in translation theory*. (pp. 99-104). Helsinki: Oy Finn Lectura Ab.
- 小森陽一(2001)『ポストコロニアル』岩波書店
- 丸山真男・加藤周一(1998)『翻訳と日本の近代』岩波書店
- マンデイ, J. (2009)『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳)みすず書房 [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies, second edition*. London and New York: Routledge.]
- 森岡健二編(1991)『近代語の成立』明治書院
- 長沼美香子(2010)「野上豊一郎の翻訳論」『通訳翻訳研究』第10号, 59-83 頁 日本通訳翻訳学会
- ナイダ, E. A. (1972)『翻訳学序説』(成瀬武史訳)開文社出版 [原著: Nida, E. A. (1964). *Toward a science of translating*. Leiden: E. J. Brill.]
- ナイダ, E. A.・テイバー, C. R.・ブラネン, N. S. (1973)『翻訳—理論と実際』(沢登春仁・升川潔訳)研究社出版 [原著: Nida, E. A., Taber, C. R., & Brannen, N. S. (1969). *The theory and practice of translation*. Leiden: E.J. Brill.]
- 中村雄二郎(1993)『中村雄二郎著作集 VII 西田哲学』岩波書店
- Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford and New York: Pergamon..
- Niranjana, T. (1992). *Siting translation: History, post-structuralism, and the colonial context*. Berkeley, CA: University of California Press.
- 西周(1875-76)「心理学翻訳凡例」西周訳『心理学』文部省 [原著: Haven, J. (1869). *Mental philosophy*.]
- 野上豊一郎(1921)「翻訳可能の標準について」『英文学研究』第3冊, 131-153 頁 東京帝国大学英文学会
- 野上豊一郎(1938)『翻訳論—翻訳の理論と実際』岩波書店
- Nord, C. (1997). *Translating as a purposeful activity*. Manchester: St. Jerome.
- ピム, A. (2010)『翻訳理論の探求』(武田珂代子訳)みすず書房 [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London and New York: Routledge.]
- Postgate, J. P. (1922). *Translation and translations: Theory and practice*. London: G. Bell and Sons.
- 佐藤亨(1986)『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
- シュライアーマハー, F. (1813/2008)「翻訳のさまざまな方法について」三ッ木道夫編訳『思想としての翻訳—ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』(24-71 頁)白水社

- Snell-Hornby, M. (1988). *Translation studies: An integrated approach*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Snell-Hornby, M. (1990). Linguistic transcoding or cultural transfer: A critique of translation theory in Germany. In S. Bassnett & A. Lefevere (Eds.), *Translation, history and culture*. (pp. 79-86). London and New York: Routledge.
- スピヴァック, G. C. (1996)「翻訳の政治学」(鶴飼哲・本橋哲也・崎山正毅訳)『現代思想』第24巻第8号, 28-52頁 青土社 [原著: Spivak, G. C. (1993/2004). *The politics of translation*. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader, second edition*. (pp. 369-388). London and New York: Routledge.]
- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of language and translation*. London, Oxford and New York: Oxford University Press.
- 杉本つとむ(1996)『江戸の文苑と文章学』早稲田大学出版部
- 鈴木貞美(2012)「野上豊一郎の「創作」的翻訳論をめぐって」『文学』第13巻第4号, 150-169頁 岩波書店
- 高野繁男(2004)『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』明治書院
- 谷崎潤一郎(1934)『文章読本』中央公論社
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Venuti, L. (1995/2008). *The translator's invisibility: A history of translation, second edition*. London and New York: Routledge.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London and New York: Routledge.
- Vinay, J.-P., & Darbelnet, J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. trans. and ed. J. C. Sager & M. -J. Hemel. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. [原著: Jean-Paul Vinay, J.-P., & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier.]
- 柳父章(1972)『翻訳語の論理—言語にみる日本文化の構造』法政大学出版局
- 柳父章(1982)『翻訳語成立事情』岩波書店
- 柳父章(2004)『近代日本語の思想—翻訳文体成立事情』法政大学出版局

